

オリンピック・パラリンピックを通じて学ぶ ～日本の文化の発信とグローバル人材の育成～

江上 いずみ

1 オリンピック・パラリンピックにおける文化プログラムの意義

オリンピック・パラリンピックは、世界最大のスポーツの祭典であると同時に、文化の祭典であるともいえます。

東京2020大会においても文化プログラムを展開することは、日本の文化を再認識し、世界に発信していく絶好の機会になります。

わが国の文化というと、まずは長い年月を経て育まれた日本の伝統や「おもてなしの心」「和の精神」といった日本的な価値観があげられます。また、世界中に多くのファンをもつアニメや漫画、安全・安心で美味しい和の食材や医療品など、世界で高く評価されている現代の文化や技術もあります。さらに「クールジャパン」と呼ばれ、世界中のファッション業界から注目されている日本の若者のファッションも発信すべき文化といえるでしょう。

オリンピック・パラリンピックに向けて、子どもたちがそういった自国の素晴らしい文化を学び、日本人としての自覚と誇りを身に付ける、あるいは次世代の子どもたちへ引き継いでいくことはとても大切なことだといえます。

一方、東京2020大会に向けて、外国人との交流機会が飛躍的に増大することが予想される中、異文化に対する理解を深め、多様性を認め合い、広い視野を持って共に生きていく態度を育成することも、子どもたちにとって極めて重

要なことです。

そのためには、オリンピック・パラリンピック参加国の文化、歴史、宗教、習慣、しきたり、価値観などについて学ぶこと、そしてそれを通じて相互に共通している点を見つけていく態度や、異なる価値観を尊重し合う態度を育成していくことも必要だといえます。

2 一校一国運動とグローバル人材の育成

そのような他国の価値観などを学ぶ文化プログラムとして行われたのが長野1998大会の「一校一国運動」です。長野市内の小中学校が、参加する特定の国と地域を担当して、各国の言葉や文化等について深く研究し、入村式に立ち会い、学校に招いたり、競技の応援をしたりすることで国際交流を図りました。市民と参加各国、そしてオリンピック・パラリンピックという大きなイベントを強く結びつけ、大会運営にも市民文化活動にも好影響を与えて、国際オリンピック委員会 (IOC) から高い評価を得ました。それ以来、一校一国運動はIOCのプログラムに取り込まれて、あとに続くオリンピック・パラリンピックに引き継がれていきました。

ソチ2014大会でも一校一国運動が展開されました。私もオリンピック教育プログラム調査のため、ソチパラリンピックを視察し、「ボランティア教育」を中心的に展開したロシア国際オリンピック大学を訪問しました。また「一校一

国運動」で日本を担当したソチ第15番学校を訪れたのですが、そこでたいへん恥ずかしい思いをすることになったのです。

ソチ第15番学校は全11学年生徒数1,100名の大きな学校です。インターネットや本を頼りに日本の歴史や文化を学んだという同校の掲示板は、さまざまな日本の写真や研究成果で埋め尽くされていました。小学校低学年では折り紙の折り方や手毬^{てまり}の作り方を、中学生にあたる学年では松尾芭蕉の俳句をロシア語と日本語で学び、高校生は松下幸之助の経営哲学を取り上げて日本の高度経済成長に関するディスカッションを行っていました。また日本のお弁当はお母さんが愛情込めて作るらしいと、白米を炊いてキャラ弁を作る授業まで行われていました。歓迎セレモニーで番傘を持ち日本舞踊を披露した生徒が、着物姿でお茶を出すその姿には思わず苦笑してしまいました(写真)。

校長先生に一校一国運動で日本を担当したことによる成果を聞いたところ、「思いやりを大事にする日本の文化を学んだことによって、わが校の子どもに寛容性が身に付きけんかが減りました」という嬉しい返答がありました。そして「私たちは『さくらさくら』の歌を覚えました。でもせっかく日本の方がいらしたので、流暢な日本語で歌っていただけませんか」と依頼されたのです。「さくら～さくら～やよいのそらは～」と歌い始めたのですが、そのあとの歌詞が出てきません。私たちは10名で行ったのですが、誰一人フルコーラスを歌える人はおらず、「Sorry.」と謝罪するしかないという、たいへん恥ずかしい思いをして帰ってきました。そのように考えると、日本の文化を知らない、きちんと外国人に説明することができない日本人が本当に多くいます。2013年12月にユネスコ無形文化遺産に登録された和食についても、その知識や食べ方を外国人に説明できる日本人がいった



写真 「日本」を表現するソチ第15番学校の生徒たち

いどのくらいいるのでしょうか。能、狂言、雅楽、文楽といった日本の伝統芸能を外国人に伝えられる人がどのくらいいるのでしょうか。グローバル人材の育成とは外国語を習得させることだけではありません。母国日本の文化を知り、外国人に正しく紹介できることも、またとても大切なことだといえます。

3 子どもたちに伝えたい おもてなしの心

私は30年間にわたり航空会社の国際線に乗務してさまざまな国の方と接し、その言語・宗教・習慣・食文化・国民性の違いを目の当たりにしてきました。国籍・文化の違いのみならず、年齢、職業や障害の有無などを含めた多様性に応じて、「機内」という一つの空間の中でさまざまな価値観を持つ人々と相対していくことは、時としてとても難しく感じることもありました。自己を確立しつつ、他者を受容して、臆せずに積極的に外国の方々をお迎えしてほしいという願いを込めて、今、子どもたちに「おもてなしの心」を伝える講演活動をしています。幅広く世界の国々を知り、異なる価値観や文化を体験的に学んで、「おもてなし」の心をもって海外の人々を迎えることができる子どもたちの育成に、これからも尽くしていきたいと思っています。

(筑波大学客員教授 えがみいづみ)